［講演］

日本語教育のプログラム評価のこれからについて

異文化コミュニケーション学部教授
前日本語教育センター長
池田　伸子 氏

○**池田**　田丸先生、ありがとうございました。私のほうからは、田丸先生が 10 年前にやっていただいた非常に画期的なプログラム評価、日本語教育にとって重要なプログラム評価という視点を受けて、その後、私たちがどういうふうにバトンを受けて日本語教育を担ってきたのかということ、それを受けて、今私たちが置かれている状況、それを自戒も込めてというか、反省も込めてお話しするとともに、今後、日本語教育センターがどういう方向で向かっていくべきなのか。どういうふうに評価を教育に利用していくべきなのかということをお話しさせていただければと思います。**【スライド②-1】**

　きょうのお話の流れですけれども、まず私たちが 10 年前から現在まで、何をしてきたのか。その結果、今私たちはどういう状況に置かれているのか。そしてこれから私たちが行っていくべき評価というのはどういうものなのか。こういう流れでお話をしていきたいと思います。田丸先生からもお話がありましたように、立教大学のこの 12 月のシンポジウムは堅苦しいものではなくて、日本語教育に携わる皆さんが、ふだんはあまり公の席で言えないような本音をぶつけてお互いの悩みを共有し、これからお互いにどうよくなっていくのか、発展していくのかということを考えていく機会だと思っていますので、私もそのつもりでお話をしたいと思います。さっきまでいた統括副総長の白石先生、いなくなりましたので、若干自由度が増しております。ただ、山口先生、機構長で身内ではありますが、半分、国際化担当の副総長でございまして、半分外でございますので、若干その辺も意識しながら発言を行っていきたいというふうに思います。では、始めます。**【スライド②-2】**

まず 10 年前。今お話ししいただきましたように、田丸先生が科研で、それまで私たち日本語教育担当者に欠けていた視点について、重要なご指摘をくださいました。その中で、先生のお話にもありましたように、評価というのはやらなければいけないからやるというようなものではなくて、やっぱり自分たちのための評価、自分たちがどうしていくかを考えるための評価でなければいけないというお話がありました。そして、自分たちの中だけでやっておしまいというのではなくて、どういうふうに評価を行っているのか、その結果どうなったのかということを、やはり透明性ということを大事にして、客観性を持って行わなければいけないということ。それから、内々でやるのではなくて、ある程度外部の視点も必要だということ。それから孤立してやるのではなくて、大学内のほかの組織との連携、それから関係性の中できちんと実施をしていくべきだというような、非常にその当時で考えると画期的なことをご指摘いただきました。

私は、今は立教大学におりますが、十数年前は、某国立大学の留学生センターというところにおりましたので、先生がお話しくださった留学生センターという組織の持つ、何というんでしょう、動きにくさというか、やりにくさというのは、身をもって感じていました。ただし、そういう留学生センターの置かれているような状況、その動きにくさ、やりにくさというものが、果たして文部科学省であるとか、国立大学というような組織的な原因によるものだけだったのかということも、改めてきょうは考えてみなければいけないことだというふうに思っています。

まず、田丸科研後、私たちが何をしてきたのかということですが、まず、「私たち」と、きょうこの講演の中で言わせていただく対象としては、日本語教育関係者、日本語教育に携わっている者です。日本語教育に携わっている人たちは、みんな使命感にあふれています。これはほかの人たちがどうということではなくて、日本語教育に何らかの形で日本語教育を行っている者は、学生の日本語をとにかく上手にしたいという、そういう使命感はみんな非常に強く持っています。それから、真面目です。自分たちが、どうやったら学生の日本語がうまくなるのかということに、本当に真面目に取り組んでいます。そして一生懸命です。それをどうにかして達成しないといけないというふうな一生懸命さを持っています。そして学生思いです。とにかく学生の身になって、学生の立場になって、学生の日本語をうまくしてあげないと、というふうに常に考えます。そして純粋です。

この文字、赤くなっています。大事です。純粋です。本当に一生懸命、その使命を全うしなければいけないというふうに思っています。

そんな私たちですが、日々、評価は行ってまいりました。でも、どういう評価だったかというのを、今改めて振り返ってみると、内向きな評価ではなかったかというふうに思っています。そしてもう 1 つ、画一的ではなかったかということです。田丸先生のお話にもありましたように、テンプレートをつくって数字を入れ替えればいいというような評価はやっても意味がないというふうに言われたにもかかわらず、それから後、私たちが日々取り組んできた評価は、内向きで画一的だったというふうに分析をしています。では具体的にどういうことかといいますと、私たちが行ってきた評価は、学生の日本語がどのくらい伸びたのか。それから学生の異文化理解の能力であったりとか、スキルというのが、どのくらい伸びたのか。そういう視点での評価だけを行ってきたのではないかというふうに思っています。

これはもちろん、とっても大切なことで、私たちの 1 つの使命は、学生の日本語力をアップさせ、それから外国人学生のみならず、日本人学生の異文化理解能力も向上させること。それは私たちが負っている使命、重要な使命でもありますから、それがちゃんとできているかどうかを評価するということは重要なことです。でも、やっぱり、どうしてもその評価は、私たち日本語教育を行っている組織の中の評価です。そして評価をした後も、またまた内向きです。その評価結果を公表していないわけではありません。が、誰に向かって公表してきたかというと、主に関係者同士、例えば学会で発表してみたりとか、あるいは日本語教育関連のシンポジウム、あるいは交流会みたいなところで発表してみたりとか、そういうふうに、主に同じようなことをしている人たちの間で共有し、あそこでうまくいっているのはどうしてか、どういうふうにやっているからうまくいったのかというのをお互いに学び合っていた。それは重要なことですけれども、やっぱり内向きだったのではないかというふうに思っています。

そしてもう一方の画一的ということですが、ここはやっぱり評価項目、ここについて画一的だったというふうに私は認識しています。田丸先生のお話にもあったように、自己点検、自己評価、それから認証評価というのが大学の中で、本当に毎年、毎年、行われるようになってくると、授業評価というのが大学の教員の日常になっていきます。そうすると、どういうことが起きるかというと、その大

学、その大学、その組織、その組織で用いるアンケート項目というのがあって、それに合わせる形で行われるというのが多かったのではないかと思われます。

例えば、留学生センターなどでは独自の評価項目で行っているというところもあるとは思うのですが、多くの場合には、その大学の中のアンケート項目に合わせる形で行われてきた。後ほど申し上げますけれども、総合科目と外国語教育科目はかなり性質が違うというふうに田丸先生もおっしゃっていましたように、そこでの評価項目が違っているということはあったかと思います。だけれども、日本語教育も、他の外国語教育と一くくりにされる中で、同じ外国語だからということで、同じような評価項目で評価がなされてきたのではないかということです。それと、やはり日本全国津々浦々の、日本語教育機関で行われている評価のアンケート項目を見ても、やっぱり画一感は否めない。やっぱり同じような評価項目を評価しているということ。その内向き、画一的、そういう評価を日々真面目に行ってきたということだろうと思います。その結果、今、国際化の波が、非常に強い波が大学に押し寄せてきていて、その中で私たちは、ちょっと困ったなというふうに思っている。ニコニコ顔ではないということです。どうしようかな、どうしようかなというようなのが、私の考える今の状況です。**【スライド②-3】**

それをもう少し詳しく説明しますと、これは昨年のシンポジウムでも使わせていただいたスライドなんですけど、今、私たちが置かれている状況というのは、要らないとは思われていない。だけど認知度は高くない。それから重要というより、そこそこ何かやってくれているだろうなとは思われているけど、あんまり重視されていない。というのが私たちが置かれているスタンスなのではないかということです。

大学の国際化という状況になったときに、多くの大学は 2 つの軸を考えます。学生の送り出しと、留学生の受け入れ。そこで学生の送り出しというのは、まあ、協定校を増やしたりとか、いろいろな留学プログラムを開発したりとか、海外インターンシップを始めたりとか、だいたいそんなものでしょう。ここを一生懸命やるというのは、日本語教育組織にとって何も異論ない。頑張ってほしいと思います。

もう一方、留学生を増やすということになったときに、ちょっとドキッとするわけですね。あ、ちょっと何か来るかなというふうに思うんですけど、結構そうじゃなくて、まず大学が何に躍起になるかというと、英語で展開するプログラム

の開発。これは文科からの圧力というのもあるんでしょうけれども、英語で展開するプログラムをつくらなきゃとか、アカデミックカレンダーとか、学内の英語対応、国際寮の整備、そっちにどんどんお金が使われていくという現実があります。結局、留学生を増やすといっても、英語で展開するプログラムなのねという、ちょっと、あれ？　というような感覚は否めない。

だけど、ちょっとここで、きょうの参加者は別ですので。白石先生はいなくなりましたけれども、決して立教大学の上のほうがそうだと言っているわけではなくて、認知度にばらつきがある。例えば大学の国際化ということになったときに、そのために日本語教育組織は重要だというふうに思ってもらえる人と、いや、まあ英語のほうを充実させればいいんじゃないという人との間の認知度の開きがある。それから重要だと思ってもらっている度合の開きがあるというのが今、私たちが置かれている現状ではないかというふうに思います。**【スライド②-4】**

どうしてこんなことになったのかということで、きょうは石田先生はお見えになっていませんが、田丸先生と石田先生、それから田中先生なんかがちゃんと言ってくれていたのに、ごめんなさいというのが、今の私たちが置かれている状況ではないかということです。それは評価の内向き化、評価の画一化、それをずっと長い間続けてしまったからということです。

でも、ちょっと言いわけになりますが、どうして日本語教育組織の評価がずっ

と内向きになってきたのかというと、真面目で、学生思いで、使命感にあふれているからです。やっぱり自分たちの使命をちゃんと果たせているのかということを、きちんと評価として、結果としてあらわさないといけないという思いが非常に強いから、だからそういう内向きの評価というのが続いた。それから、ここは反省しなければいけない点だと思っていますが、誰のための評価かという視点が全くなかったというふうに思っています。自分たちのための評価でしかなかった。つまり自分たちが知りたいわけです。学生の日本語がどのくらい伸びたか、学生の異文化理解がどのくらい高まったか。それは、私たちが知りたいから調べたというような視点。そうじゃなくて、私たちを取り巻くいろいろなオーディエンス、私たちにいろいろ関わっている人たちが何を知りたいのかということを全く検討せずに、この 10 年間走ってきたということだろうと思います。

なので、やはり独りよがりの評価、評価というよりは研究。研究者というのは、自分の知りたいことを調べて、その結果を出しますが、評価というのは、決して自分たちのためだけであってはいけないものです。質の保証というお話もありましたけれども、説明責任というのも評価の大きな目的の 1 つです。説明責任を果たすためには、誰に何を説明するのか。つまりは、誰が何を私たちに求めているのか、知りたがっているのか、そこを考えなければいけなかった。けれども、その視点が抜けていたということだろうと思います。

そして評価の画一化は、ひとえに私たちが純粋で素直だからです。大学が、まあこの方向で行きましょう、この評価項目を使って、一斉にやって統計処理もするので、この方向でやってねというと、はいというのが日本語教育の先生方の大部分。これは純粋で素直という理由と、それにもう 1 つ、私たちが立場的に弱いからです。日本語教育を担っている組織、あるいは教員というのは、ちょっと弱いし、それから、ちょっと「ぼっち感」があるということです。そのぼっち感がどこから来るのかというと、Dissemination。Dissemination というのは、評価を行った結果をどう公開し、公開だけじゃない、宣伝するかということなんですけど、報告し、宣伝するか。それが下手というよりは、全くしていなかったのではないかというふうに思います。

どうしてしていないのかというと、「ぼっち」だからです。つまり、どことつながればいいのか、それから、誰に訴えればいいのかということが、いま 1 つ見えていない。立教大学程度の規模ですと、とてもちょうどいい感じで、大学の

偉い人との距離もそれほど遠くないですけれども、大学の規模が大きくなればなるほど、このぼっち感は増していきます。特に留学生センターみたいな組織というのは、わざと切り離されて置かれているというところが多いので、この問題を誰に言えばいいのかというといころが見えていない。だから上手に Dissemination ができない、あるいはやってこなかったというところがあると思います。その結果が先ほど申し上げたような状況になっているんだと思います。**【スライド②-5】**

でも、ずっとこの何年間か取り組んできている中で、私たちは覚醒しました。去年あたりから。何に覚醒したかというと、日本語教育という視点と、プログラム、システムという視点、この視点を忘れずに評価をすること。それが重要だということです。日本語教育という視点からは、まず現地語、生活言語としての日本語というスタンスを強く打ち出すこと。これは大学に対して、他の外国語と日本語は違うんですよというメッセージを発することになります。それから教育プログラムを実施しているものですから、形成的評価、つまり評価を定期的に行って改善をしていく、インプルーブのための評価と、それから、あるコース、あるカリキュラムがどのくらい有効なのかということを証明するための評価、これをきちんと行っていかなければいけないということ。それから教育のプロフェッショナルですから、多様なプログラム、教材開発、それから海外との連携、これも日本語教育でできることというのがたくさんあります。その視点を忘れないということ。

それからシステムという視点では、オーディエンスの検討。誰に対して何を言っていくのかを知るための、私たちを取り巻くどんなオーディエンスがいて、何を知りたいと思っているのかということ、あるいは知りたいと思っていなくても、知らなきゃいけないですよというふうに押しつけていくのか。その訴える先をきちんと検討するということ。それから組織内の連携。まず一方で、私たちに何ができるのかをきちんと広報していくとともに、助けてくれるのねというお互いさま感ですね。私たちもこうします。でも私たちも助けてくださいということを明確に発信していく。それから全て Dissemination、誰に何を知らせるべきか、きちんとした根拠を持って。この両方をこれからはきちんとやっていかなければいけないということに気がついたということです。**【スライド②-6】**

その上で、私たちがこれからどういう評価を行っていきたいかということです。

日本語教育研究組織、赤くなっていますけれども、これは日本語教育センターができてから、私がずっと、研究は必要だ、研究は必要だと、念仏のように唱えていることでございますが、この組織が行った評価を、学習者、それから国内外の日本語教育機関、それから大学の国際化担当の偉い人、それから学内の担当部局、それぞれ向けて、それぞれに同じことを発信するのではなく、それぞれのところに、何をどう効果的に届けるかということを、きちんと考えて、計算して、評価を行っていかなければいけないということです。

学習者に対しては、これまで私たちが真摯に、まじめに取り組んできた評価を、もっと洗練させて、きちんと伝えていけばいい。学習者に伝えること、学習者がきちんと効果が出たと実感することは、それが将来的には、所属している大学の知名度であったり、日本語能力に対する評価を上げていくことにもなります。だからここは重要です。それから国内外の日本語教育機関にもきちんと発信をしていくことで、やはり海外における、その大学の知名度はアップしますし、日本語教育を軸とした連携、共同というのが、今よりももっともっと効果的に生まれてきます。

それから学内の関係部局、ここですが、外国語教育組織に対しては、日本語教育と、いわゆる英語、それからフランス語、ドイツ語、そういうところは違うんですということをきちんと伝えていくということ。それからお互いに協力できるところは協力していくということ。それからさまざまな組織、国際センター、学生相談所、さまざまな組織には情報発信して、わかってもらうとともに、お互いに協力できるところはしていく体勢をつくること。それから学部研究科にも理解を深めてもらい、私たちにどんどん仕事を発注してもらえるような関係をつくること。

それから大学の国際化担当の偉い人に対しては、私たちがちゃんと貢献しているんだということをきちんと伝えていく。とともに、助けてください、どうにかしてくださいということを要請していく。そのためにも理解を促進したりするための、きちんとした根拠を示していく。そこで重要になってくるのが、やっぱり大学の国際化担当と共通のゴールを持つことだと思っています。それぞれの部局が別々のゴールを目指して走っても、非常に非効率的ですから、そのゴールの共有から築き上げられる信頼関係、それをつくるためにも、評価というのはこれから使っていかなければいけないだろうというふうに思っています。

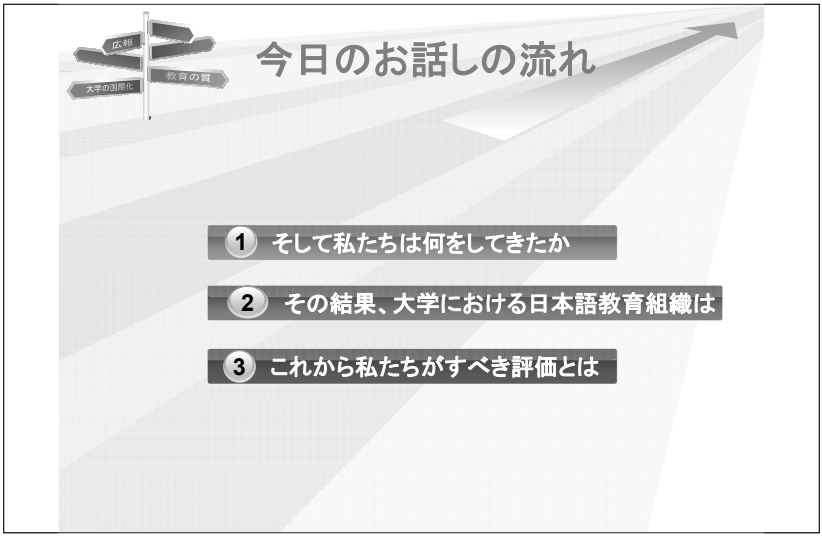
一言でいうと、外向きで、独りよがりにならず、やっぱり外部の視点、オーディエンスの存在、これを常に意識した評価、これを行っていくべきだというふうに思っています。ニッコリ笑って、根拠を持って、主張をお願いするための評価。私はここでちょっと最近反省したんですけれども、けんかを売っていくだけではなく、けんかを売るにもいろいろな売り方があるということを学び、ニッコリ笑ってお願いをするというような、そういうかわいい視点もこれから取り上げながら、日本語教育というのがますます大学の国際化にとって重要だと認識されるような評価について、立教大学から発信していきたいというふうに思っています。以上でございます。ありがとうございました。（拍手）**【スライド②-7，8】**

○栗田　池田先生、ありがとうございました。

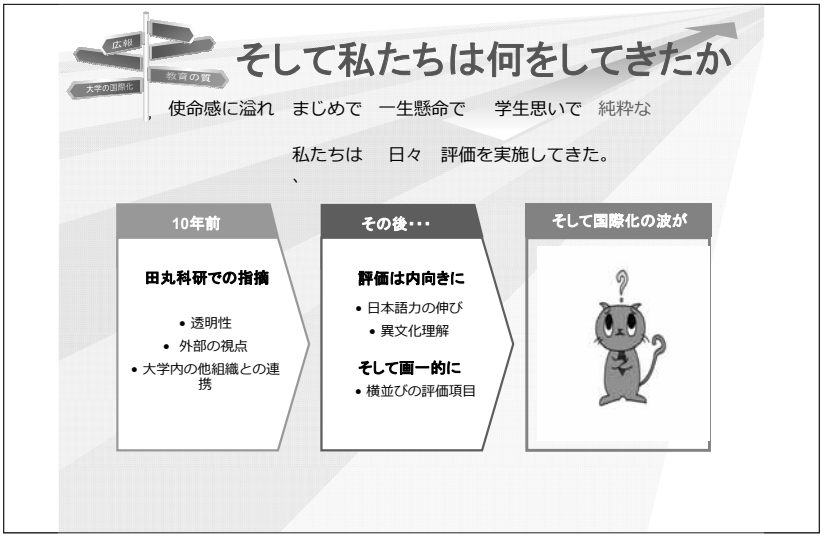
続きまして、第１部最後のご講演です。山口先生にお願いいたします。

【スライド②-1】

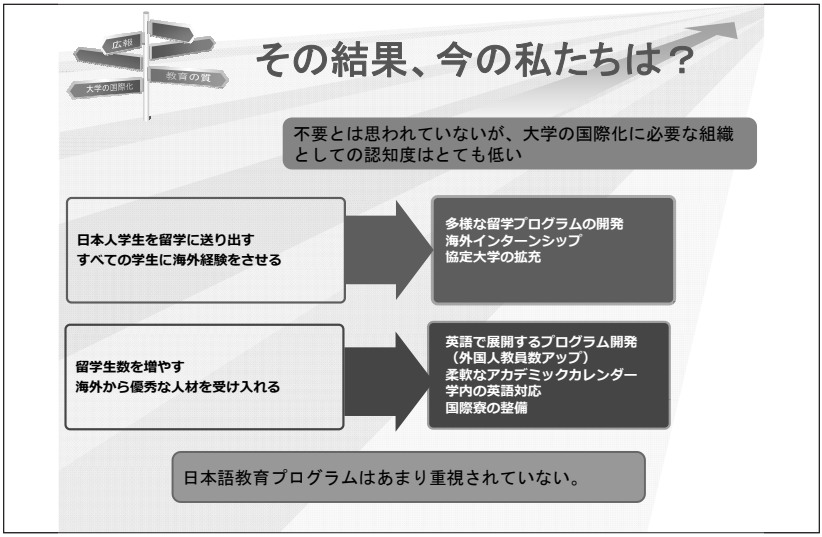
【スライド②-2】



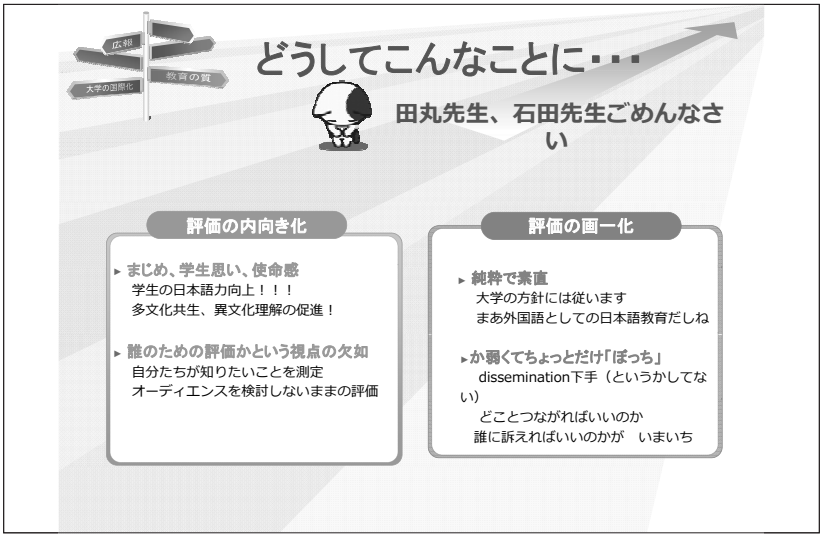
【スライド②-3】



【スライド②-4】



【スライド②-5】



【スライド②-6】

【スライド②-7】

【スライド②-8】